

微母の音価をめぐって

中村雅之

1. 微母のあらまし

宋代以降、漢語の声母カテゴリーを 36 個の代表字(いわゆる三十六字母)で表す習慣が定着した。それは声母のカテゴリーは示すが、音価は表さない。個々の音価は時代と地域によって異なる場合が多い。本稿はその中の一つである微母について若干の考察を試みるものである。

微母は前期中古音(=『切韻』の体系≒6 世紀の洛陽音・南京音)では明母と未分化の状態では [m-] であったと考えられている。後期中古音(=唐代長安音)では軽唇音化と非鼻音化を経て [mjv-](後には [v-]) になった。近世音(=本稿では 10 世紀以降の北京音と定義する)においては一貫してゼロ声母(-u-介音を伴う)であった。現代のゼロ声母が [v-] を経て形成されたものと説明されることもしばしばあるが、そのように考えるべき根拠はない。近世音が(日母を除いて)非鼻音化を経験していない以上、微母に [v-] の段階があったとするのは論理的に無理がある。なお、現代の北方諸方言の中には音声として [v-] を持つ方言が多くあるが、そのほとんどはゼロ声母の場合に現れる介音 -u- の異形態であって、微母の問題とは必ずしも関係ない。

2. 現代方言の微母

主要な現代方言における微母の音価は、上記の前期中古音、後期中古音、近世音に対応する 3 種に集約できる。すなわち、呉方言など南方方言の白話音では微母は軽唇音化を経っていないため [m-] であり、西安方言は後期中古音の流れを汲んで [v-]、そして北京音はゼロ声母である。呉方言の文言音で微母が [v-] となるのは後期中古音の影響と考えられる。南京音では北京音と同様にゼロ声母であるが、元代における北方音化の反映であろう。明清の官話を記したローマ字資料の中には微母に「v-」の表記が見られることもあるが、それについては後述したい。

南方方言の白話音では、非・敷・奉母は軽唇音化したが、微母は軽唇音化しなかった。北方方言では微母は通摂(「夢」「目」など)と流摂(「謀」「牟」など)では軽唇音化せずに [m-] を保ったが、それ以外は全て軽唇音化して、ゼロ声母や(非鼻音化を経た) [v-] になった。軽唇音化の範囲が北方と南方で異なっているのである。¹

非鼻音化は唐代の長安(西安)を中心とする西北方言に限られた現象である。日本の漢音はその状態をよく反映する(「木(ボク)」「男(ダン)」など)。唯一、日母だけは北方方言、および呉方言の文言音などで非鼻音化を経た音形が確認できるが、明・泥・疑母にわたる広範囲の非鼻音化はほぼ西北地域に限られた特徴と言える。西安方言における微母の [v-] はそのよう

¹ 軽唇音化はまず通摂と流摂における唇音声母と唇音性韻尾の異化作用によって生じたと考えられる。それについては中村 2011 で論じたことがある。

な特徴の名残と見なすことができる。[m-] > [mj-] (軽唇音化) > [mjv-] (非鼻音化) > [v-] という変化が想定できよう。ただし、現在の西安方言では微母以外の明・泥・疑母における非鼻音化は、おそらくは官話の影響で、今では影をひそめてしまった。微母の場合は、摩擦音化によって前鼻音を失い、それによって鼻音に戻れない状態になったのである。鼻音要素を失ったという点では、いち早く非鼻音化した日母の場合と同様のメカニズムが働いたと考えられる。

3. 『西儒耳目資』などの微母

フランス人ニコラ・トリゴー (Nicolas Trigault / 金尼閣) の編になる官話の発音辞典『西儒耳目資』(1626年刊)では、微母に2種の表記が併用される。藤堂明保 1980:p.119 はこれについて次のように述べる。

「微」母字は、当時の標準官話(A方言)では「影」母合口と混同し、山西陝西官話(B方言)では、とくにマサツのつよい/w/であった。原書(=『西儒耳目資』)に「微」ui または vi、「韃」ua または va とあるが、その前の音は前者を、又音は後者を示す。

卓見と言うべきであろう。ただし、A方言を藤堂氏は北京語と考えたようであるが、今では南京方言(=南京官話)とする見方が主流である。B方言を山西陝西官話とするのは、巻首に「泰西金尼閣撰述 晋絳韓雲詮訂 秦涇王徵校梓」と記述があり、山西と陝西の二人が編纂に関わったことによる。

要するに、微母は南京ではゼロ声母であったが、北方西部で[v-]であったのをトリゴーが記述したということである。同様の二重表記は果摂合口にも見える。「過」を ko および kuo とするなどであるが²、前者がA方言(南京音)、後者がB方言(山西陝西官話)ということであろう。

フランシスコ・ヴァロ (Francisco Varo) の『官話文典』(Arte de la lengua Mandarina, 1703 刊)の巻末に「告解捷法」(Brevis Methodus Confessionis Instituendae)なる資料が付載されている。古屋昭弘 1991 は「聴解神父の例文集」として紹介した。そこでの微母は「忘 vang / vuang」「問 vuen」など「v」で記される。「未 ui」の例もあるが、「v」が主流である。この資料は陝西の代牧を務めたバジリオ・ディ・グレモナ (Basilio di Glemona) によって作られたというから、その言語は陝西の官話と考えてよい。それゆえ、微母が「v」で記されているのである。明清のローマ字資料に記される微母の「v」はいずれも陝西省など北方西部の官話に基づいたものと考えて差し支えないようである。

4. 「微」の声調

微母は明・泥・疑・日・来・喻母などと共に次濁音に属し、平声微母字は陽平声(普通話の第2声)になるのを通例とする。「亡」「聞」「無」などはいずれもその例に該当する。しかし、「微」は例外的に北京音では陰平声(第1声)である。影母の「威」と完全に同音になっている。止摂では他にも、平声疑母の「危」がやはり北京音では陰平声になる。

「微」「危」の北京音が陰平声であるのは通例から外れるが、その要因は、第一に微母と疑母

² 声調記号は省略する。以下同。

が早くからゼロ声母になっていたこと、第二にこの 2 字が口語語彙として頻用されることが挙げられる。長期にわたって正音であり続けた南京音ではこの 2 字はゼロ声母でありながら、通例どおり陽平声である。興味深いことに、西安音では、「微[vei]」は陽平声であるが、ゼロ声母の「危[uei]」は陰平声である。³

「微」「危」は方言によっては上声に転じる例もあり、解釈は必ずしも容易ではないが、北京語においてこれらが相当早くからゼロ声母であったことは、図らずもその例外的な声調が示唆しているのではあるまいか。

<参考文献>

藤堂明保 1980, 『中国語音韻論---その歴史的研究---』, 東京:光生館.

古屋昭弘 1991, 「清代官話の一資料---ヴァロ・グレモナの「聴解神父のための例文集」---」『中国文学研究』17.

陳章太・李行建主編 1996. 『普通話基礎方言基本詞彙集』, 北京:語文出版社.

中村雅之 2011, 「軽唇音化の進行過程---異化作用による解釈---」『KOTONOHA』117.

³ 陳章太・李行建主編 1996 による。